論文要約

現代オーストラリア社会系教科カリキュラム構成論研究
ーナショナル・アイデンティティ形成における文化的多様性と国民統合の調停ー

広島大学大学院 教育学研究科
教育学習科学専攻　教科教育学分野
社会認識教育学領域

D194938　　両角遼平

論文構成

序章　本研究の意義と方法

第１節　研究主題
第２節　本研究の意義と特質
第３節　研究の方法と本論文の構成

第１章　オーストラリア社会系教科教育の特質・史的展開と研究動向
—ナショナル・アイデンティティ形成に着目して—

第１節　オーストラリアの教育制度と社会系教科の理念と特質
第２節　ナショナル・アイデンティティ研究の史的展開と概念規定
第３節　ナショナル・アイデンティティ形成から見た日本の社会科教育研究の動向
—価値注入・態度形成としての国民教育の批判—
第４節　ナショナル・アイデンティティ形成から見たオーストラリアの社会系教科教育研究の動向
—変動する「オーストラリア人」の模索とその再構築—

第２章　オーストラリアの社会系教科カリキュラムの類型化
—ナショナル・アイデンティティ形成に着目して—

第１節　理念型の設定
第２節　カリキュラムの編成と構成の統合的説明

第３章　国民動員型カリキュラム
—公民科専門家グループ「デモクラシーの発見ユニット」（1998）—

第１節　カリキュラム開発の経緯
—多文化主義批判と国民統合の危機—

第２節　「デモクラシーの発見ユニット」のカリキュラム構造
第１項　全体構成―民主主義の歴史的発展過程の提示―
第２項　単元構成―多文化主義政策の問題発見と民主主義に基づく解決策の検討―
第３節　カリキュラム開発の評価，その論点争点
―連邦政府との関係はどうあるべきか・どのような市民を育てるべきか―
第４節　文化的多様性と国民統合の調停の論理
―普遍的価値による国民の一元的統合―

第４章　国民参加型カリキュラム
―クイーンズランド州「社会と環境」（2000）―

第１節　カリキュラム開発の経緯
―分化カリキュラムの批判とアメリカ新社会科の影響―
第２節　「社会と環境」のカリキュラム構造
第１項　全体構成―人間と環境を社会科学的に捉える枠組みの提示―
第２項　単元構成―多様な人々の参加による共通記憶の創造―
第３節　カリキュラム開発の評価，その論点争点
―教科課程の基盤となる思想とは何か・教科はどの程度統合するべきか―
第４節　文化的多様性と国民統合の調停の論理
―文化的多様性の尊重による国民像の協働的統合―

第５章　国民再構築型カリキュラム
―ニューサウスウェールズ州「歴史」（2012）―

第１節　カリキュラム開発の経緯
―ナショナル・カリキュラムの影響と歴史教育の一律的導入―
第２節　「歴史」のカリキュラム構造
第１項　全体構成―複数のアイデンティティに基づく複数の歴史像の提示―

第２項　単元構成―民主主義・人権・多文化の視点からの歴史学的探究―
第３節　カリキュラム開発の評価，その論点争点
―カリキュラムは州ごとに最適化するべきか・教科は学問を基盤とするべきか・どのような歴史観に依拠するべきか―
第４節　文化的多様性と国民統合の調停の論理
―文化的多様性の視点に基づく国民の範囲の再評価―

終章　本研究の成果・課題・示唆

第１節　本研究の成果と課題
第２節　本研究が示唆すること

主要参考文献一覧

論文の要約

序章　本研究の意義と方法

本研究は，オーストラリアの社会系教科教育カリキュラムをナショナル・アイデンティティ形成における文化的多様性と国民統合の調停という観点から問い直すことで，日本の社会科教育の変革に向けたカリキュラム開発の議論の枠組みを提起することを目的とする。具体的には，以下２点に取り組む。

第１に，オーストラリアの社会系教科カリキュラムにおいて文化的多様性の尊重と国民統合の関連づけがいかに図られ，議論されてきたかを明らかにすることである。従来，オーストラリアの社会系教科カリキュラムについては，地理教育や歴史教育，シティズンシップ教育，環境教育，グローバル教育といった視点から個別のカリキュラムを分析し，その特質を解明する研究がなされてきた。しかし，これらの研究では，2000 年前後の現代オーストラリアにおける移民政策や教育政策の動向を踏まえ，その特徴であるナショナル・アイデンティティ形成を視点とした分析がなされていない。そこで本研究は，文化的多様性の尊重と国民統合という要求がオーストラリアでいかに提起され，それをカリキュラムとしていかに受容し，具体化してきたかをフィールドに即して明らかにする。

第２に，国民国家の現代的な動向を踏まえて，社会系教科カリキュラムにおけるナショナル・アイデンティティ形成の目的・内容・方法を問い直す必要性を明らかにすることである。従来，日本の社会科教育では，国家の構成員（メンバーシップ）を育成する教育を忌避し，民主主義社会を担う自立した市民の育成が目指され，研究が積み重ねられてきた。しかし，近年の国民国家における構成員の社会的・文化的背景は実態として多元化・複層化している。そこで本研究は，国民国家をめぐる状況が変化している現代において，改めてナショナル・アイデンティティの形成について問い直す。文化的多様性の尊重と国民統合の関連づけをめぐって，どのようなナショナル・アイデンティティとそれを育成するカリキュラムが提起されているかを解明したい。

本研究の特質および意義として，以下の３点が指摘できる。

第１に，ナショナル・アイデンティティの形成を試みた社会系教科教育カリキュラムを，文化的多様性の尊重と国民統合の視点から理念型（ウェーバー，1998）と

して示し，個別のカリキュラムの分析を試みる規範的原理的研究（草原，2015）を志向する点にある。先行研究を批判的に再構成することで，社会系教科カリキュラムにおけるナショナル･アイデンティティ形成を説明する枠組みとして，国民動員，国民解体，国民参加，国民再構築という４つの立場を提起する。これらの理念型を視点にして，国民国家の再編・強化を試みる「ネオ国民国家」における社会系教科カリキュラムの複数の応答を明らかにするところに特質と意義がある。

第２に，４つのナショナル・アイデンティティ形成の理念型とその対立関係を，オーストラリアの個別カリキュラムとそれをめぐる議論・言説を分析することで論証したり，示唆を得ようとしたりする規範的原理的研究の直接提案型研究（山田，2015）を志向する点にある。本研究で参照するのは，以下の３つのカリキュラムである。まず，オーストラリア連邦政府により設置された公民科専門家グループが1998 年に開発した「デモクラシーの発見ユニット」とそれをめぐる言説である。国民動員型のカリキュラムの典型例として位置づける。次に，クイーンズランド州が2000 年に開発した「社会と環境」とそれをめぐる言説である。国民参加型のカリキュラムの典型例として位置づける。最後に，ニューサウスウェールズ州が 2012 年に開発した「歴史」とそれをめぐる言説である。国民再構築型のカリキュラムの典型例として位置づける。2000 年前後を画期とするオーストラリアのカリキュラム開発を事例に，ナショナル・アイデンティティ形成を図る社会系教科カリキュラムの理念型とその関係性の考察を試みるところに特質と意義がある。

第３に，上述の２点の特質を踏まえて，日本の社会系教科カリキュラム研究史に埋め込まれた規範・フレームを批判的に問い直し，ナショナル・アイデンティティ形成のオルタナティブを提起するメタ理論的規範的研究を志向する点にある。従来，日本の社会科カリキュラム研究では，国民動員型に対置される国民解体型，そして両者に対置される国民参加型が提起されてきた。しかし，「ネオ国民国家」における新たなナショナル・アイデンティティのあり方を模索し，つくり上げようとする多様な動きを理論的に位置づけ，評価するには至っていない。そこで本研究は，日本の研究動向における，ネオ国民国家出現以前の二項対立の図式から導かれるカリキュラム開発の実践動向を，そして出現以降の（欧米を中心とするカリキュラム分析から導かれる）二項対立のカリキュラム分析の研究動向を批判的に再構成したい。このような社会科教育研究史のレビューに基づき，日本固有の文脈に根差した国民再構築型のカリキュラム･単元を開発する必要性を提起する点に特質と意義がある。

第１章　オーストラリア社会系教科教育の特質・史的展開と研究動向
―ナショナル・アイデンティティ形成に着目して―

第１章では，まずオーストラリアにおける教育制度と社会系教科について概観する。次に，ナショナル・アイデンティティ概念をめぐる史的展開をもとにその概念規定を行う。そして，ナショナル・アイデンティティ形成の視点から，日本の社会科教育研究及びオーストラリアの社会系教科教育研究の動向を整理する。

オーストラリアの教育制度や社会系教科の理念や特質とは何であろうか。移民政策との関係から概観することで，その理念や特質として，以下の３点が挙げられる。第１に，オーストラリアは，白豪主義政策から多文化主義政策へと世界で類を見ないほど移民政策を劇的に転換させたことである。第２に，オーストラリアの教育制度の形成と発展は，平等・公正・参加・卓越を理念としてきたことである。第３に，オーストラリアにおける近年の社会系教科をめぐっては，リベラルな国家政策との関連から，歴史教育の一律導入が図られたことである。

ナショナル・アイデンティティとはどのようなものであろうか。本研究では，Verdugo and Milne（2016）を参考に，この概念をめぐる３つの立場を示すことで概念規定を試みる。第１の立場は，ナショナル・アイデンティティが近代化の結果生み出された想像上の共同体であることを主張し，その構築性を暴いた構成主義である。第２の立場は，ナショナル・アイデンティティと前近代的な共同体との歴史的連続性を主張し，構成主義への反論を行った本質主義の立場である。第３の立場は，ナショナル・アイデンティティを民族性や文化にとらわれない，国家の正統性や価値との関係から捉えるシビック・アイデンティティの立場である。本研究は，上記の３つの立場から，個別カリキュラムにおけるナショナル・アイデンティティ形成上の特質を分析する。

日本の社会科教育研究において，ナショナル・アイデンティティはどのように議論されてきたのであろうか。先行研究より，以下の３つの特徴が見出せる。第１に，過去の日本国内のカリキュラムや教科書への構成主義的な批判である。これは，過去または現行の学習指導要領や教科書の分析から，子どもの認識を国民意識形成へと操作する意図性を暴く研究である。第２に，子どもの認識の本質主義から構成主

義への変容である。これは，子どものもつナショナル・アイデンティティ概念の認識を，排外性や自国・自民族優越主義を伴う本質主義的なものから，より構成主義的なものへと変容させることを目指す開発的実践的研究である。第３に，外国カリキュラムの分析における本質主義とシビック・アイデンティティの相対化である。これは，より統一性を重視して民族性や文化に由来する事象（共通の祖先や言語，歴史，民族性，世界観など）を統合の核とするか，より多様性を重視して権利や国家の統治の正統性に関連する価値（民主主義，多文化主義，憲法など）を統合の核とするかという異なるカリキュラム編成を示す分析研究である。以上の整理より，ナショナル・アイデンティティの扱いにおける課題を２点指摘できる。第１の課題は，開発的・実践的研究では，一貫して本質主義としてのナショナル・アイデンティティが否定されていることである。第２の課題は，本質主義から構成主義への変容を過度に強調する実践がなされてきたことである。

オーストラリアにおいてナショナル・アイデンティティに関わる教育はどのように議論されてきたのであろうか。同国のナショナル・アイデンティティをめぐる議論の特徴として，以下の３点が挙げられる。第１に，オーストラリアのナショナル・アイデンティティの捉え方は，時期によって揺れ動いてきた。オーストラリア人であることは，20 世紀前半にはイギリスへの献身を指し，20 世紀後半からは法的主体としてのオーストラリア市民であることを含み，近年では公民的知識と言語能力に依拠するものとなってきている。第２に，1990 年代より主に歴史教育やシティズンシップ教育においてナショナル・アイデンティティ教育の必要性に関する議論が積み重ねられてきた。移民の増加や多文化主義への批判が高まる中で，ナショナル・アイデンティティの強化が教育へ要請されるようになり，その主な論争の舞台となったのが歴史教育とシティズンシップ教育である。第３に，日本におけるオーストラリアの教育を対象とした研究においても，同国の特徴としてナショナル・アイデンティティが取り上げられることが多い一方で，社会系教科カリキュラムの分析研究ではこの視点からの分析は十分になされてこなかった。

第２章　オーストラリアの社会系教科カリキュラムの類型化
―ナショナル・アイデンティティ形成に着目して―

第２章では，社会系教科カリキュラムにおけるナショナル・アイデンティティ形成を分析するための理念型を設定するとともに，具体的なカリキュラム分析の手続きとして編成と構成の 2 側面からの統合的な説明を試みることを説明する。

本研究では，オーストラリアで開発された社会系教科カリキュラムの中から，ナショナル・アイデンティティ形成上，特徴的なものを取り上げて，その特質を理念型（Idealtypus）によって説明づけるという研究方法をとる。理念型を設定するにあたっては，ナショナル・アイデンティティ形成を図る社会系教科カリキュラムを類型化した二井（2006）を批判的に検討し，再構成して導いた。二井（2006）によると，社会系教科におけるナショナル・アイデンティティ形成は，文化的多様性の尊重か国民統合の優先かをめぐって４つに類型化できる。しかし，二井（2006）では，既存の国民共同体を相対化したり，批判的に再評価したりしようとする多様なカリキュラム開発の動きが看過されている。そこで本研究では，国民国家の再編や強化が目指される中でナショナル・アイデンティティの形成に向き合うカリキュラムをより多面的に捉えたい。加えて，先行研究の展開から見出された課題，すなわち動員か解体か，または動員・解体かと参加かという二項対立的な議論の構造を乗り越えることで，社会系教科カリキュラムにおけるナショナル・アイデンティティ形成を説明する枠組みとして，４つの理念型を提起できる。

１つ目の理念型は，国民動員型のカリキュラムである。１つの国民共同体を前提に，その中核となる知識の伝達と前近代以前の社会から連なる国家的伝統を創造すること（Smith，1991）で，子どもを国民化させていくことを目的とする。２つ目の理念型は，国民解体型のカリキュラムである。国家が国民の共有する記憶とその忘却を操作してきたこと（Anderson，1991）や，国家的伝統が前近代的共同体から必ずしも連続していないこと（Hobsbawm ＆ Ranger，1983）を暴き，既存の子どもの国民共同体の捉え方を解体することを目的とする。３つ目の理念型は，国民参加型のカリキュラムである。具体的には「シビック・アイデンティティ」論（Habermas，1994；Miller，1995）に基づいて，文化的に多様な背景を持つ人々が，国民共同体として統一的なシンボルや共通記憶（祭典，祝日，記念碑など）を対話的に共有，構築していく可能性を追究する。４つ目の理念型は，国民再構築型のカリキュラムである。共有されるべき国民共同体の価値・規範の問い直しや，その実現に向けた多様な市民のコミットを発見させることで，「文化的多様性」の尊重と実現を所与とした「シビック・アイデンティティ」論を批判的に捉える。

４つの理念型に基づくことで，研究上の課題として，以下の２点を指摘できる。第１に，オーストラリアにおけるナショナル・アイデンティティをめぐる議論の趨勢が捉えられていないことである。第２に，日本の先行研究では国民動員型から国民解体型へとパラダイム転換を進めつつも，国民参加型については要求に留まっていることである。これらの課題を受けて，オーストラリアの社会系教科カリキュラムを手がかりに，戦後日本の社会科教育研究のミッションともなってきた本質主義の解体から歩みを進め，国民とは何者か，私たちは何者でありたいかを問い，新たにナショナル・アイデンティティの定義を再構築するカリキュラム編成と構成の解明を本研究の課題に設定した。

カリキュラムとはどのようなものか。本研究では，カリキュラムを「理論的・仮説的構築物」であり，また「主体的・社会的構成物」であると捉える。まず「理論的・仮説的構築物」としてのカリキュラムは，目的合理的につくられる。すなわち，教育の目標に準拠して内容や方法がとられるのであり，目標達成に必要な選択と配列がなされていると想定する。次に「主体的・社会的構成物」としてのカリキュラムは，状況依存的につくられる。すなわち，必ずしも目標準拠でつくられているわけではなく，社会的要請や開発主体の思惑などを引き受けながら，理論的一貫性との間に矛盾や葛藤，ズレを含み込んでつくられる。

本研究は，上記のカリキュラム観に立ち，個別のカリキュラムの分析では編成と構成という２つの側面から特質の解明を試みる。カリキュラムの編成とは，社会系教科のスコープとシーケンスの構造であり，いかなる目標のもと，どのような内容をどのように配列しているかを指す。カリキュラムの構成とは，どのような主体による働きかけのもと，いかなる経緯を経て開発され，どのような論点争点を提起したかを指す。そして，文化的多様性と国民統合の調停とは，特定のナショナル・アイデンティティ形成を目的として組織化された「理論的・仮説的構築物」としてのカリキュラムを，ネオ国民国家的文脈を踏まえながら，主体的にどう再構成しているのかという「主体的・社会的構成物」としての論理を指す。

以上より，第３章から第５章にて個別のカリキュラムの編成と構成を分析することで，各カリキュラムが有する文化的多様性と国民統合の調停の論理の複雑さを解明する。

第３章　国民動員型カリキュラム
―公民科専門家グループ「デモクラシーの発見ユニット」（1998）―

第３章では，国民動員型に位置づく典型例として，３年生から 10 年生を対象とした「デモクラシーの発見ユニット」を分析した。本ユニットは，増加する移民・難民への不満と多文化主義批判の高まりを背景に，オーストラリア連邦政府による教育政策の影響を受けて，現在の政治制度への積極的なコミットを志向する市民を育成し，国家としての統一性を強化することを目的として 1998 年に開発された。

本ユニットは，民主主義という価値がオーストラリア人の間で共有されるべき規範であることを子どもに発見させるという目標の下で開発された。この目標を達成するために,「統治するのは誰？」「法と権利」「オーストラリアという国家（nation）」「市民と公共生活」という４つのテーマ群が設定された。これらのテーマ群は，国民がコミットするべき対象である統治組織，法体系，国民共同体，市民生活に相当する。各テーマの学習内容は，学年を追うごとに過去から現在へと時系列で配列されている。

国民共同体について直接的に扱うテーマ「オーストラリアという国家」は，５つの履修課題で構成されており，オーストラリアの国家史（19c-1998 年）が提示される。本研究では，同テーマの中で現代におけるオーストラリアとそのナショナル・アイデンティティを扱う中等中学年（9-10 年）の履修課題「どのような類の国家か？」を取り上げる。この履修課題は，５つのフォーカス・クエスチョン（FQ）から構成され，民主主義に対する国民のコミットの仕方を理解させようとする。多文化主義がもたらした危機を乗り越えるために民主主義という伝統に立ち返り，堅持するべく，国民統合に向けた国家や国民の行動の仕方を判断させる構造になっている。

続いて,「どのような類の国家か？」の中で，移民の増加による多文化主義政策の批判的検討と，民主主義的価値へのコミットを学習する典型的な単元である「FQ２．移民たちは私たちの国家をどのように形作ってきたか？」を事例として取り上げ，教授・学習過程を説明する。FQ２は，８つのアクティビティで構成されており，単元構成と同様に，現在の社会の特色を国家の発展の過程に位置づけて捉えさせる構成となっている。FQ２は，移民に注目した学習であるが，彼らの視点から社会を捉えるのではなく，学習者を国家や大臣の視点に立たせて，移民の受け入れという問

題にどのように対処してきたか，またどのように対処すべきであるかを考えさせる学習として構想されている。

本ユニットの開発では，カリキュラムの特性とねらいをめぐる２つの議論が展開された。第１に，本ユニットを，州が参考にするべきプログラムとして提供するか，教科（subject）化して強固に定着させるべきか，の対立である。第２に，育成したい「能動的市民（active citizens）」が，国家に対峙する反権力的な市民なのか，ネオリベラルな国家政策に適合する国民なのか，の対立である。連邦政府は，ネオリベラルな政策を遂行するなかで，教育に対しては強力な主導権を発揮し，高額な予算を投入したが，第１の論点に対しては前者が選ばれ，第２の論点については後者が選ばれた。国民統合のための民主主義という価値に基づく市民性教育という大方針を示しつつ，その履行は州に委ねるというカリキュラム構造を成立させた点に，本ユニットの特質がある。

「デモクラシー発見ユニット」における文化的多様性と国民統合の調停とは，民主主義を国民統合の価値として，そこへの国民のコミットの仕方を一元化させるという論理である。本カリキュラムにおいて，文化的多様性とはオーストラリアの多文化主義政策によって社会保障の受益者としての移民が増大したという福祉的・経済的課題を意味し，国民統合とは民主主義という新たな国家的伝統であり国民の規範となる価値を意味している。両者は，課題とその解決策という関係に立つことで，テーマ設定では国民がコミットするべき民主主義という価値を統治組織，法体系，国民共同体，市民生活という４つの観点から組織して国民統合を優先し，単元・学習過程では移民や難民の増加がもたらした社会保障費の増大という国家的課題の追究とその解決策としての民主主義に基づく市民の政治参加を検討させる。そうすることで，文化的多様性の課題について国民統合を理念として克服するカリキュラムが成立している。

第４章　国民参加型カリキュラム
―クイーンズランド州「社会と環境」（2000）―

第４章では，国民参加型に位置づく典型例として，１年生から 10 年生を対象としたクイーンズランド（以下，QLD）州の 2000 年版「社会と環境」シラバスを分析し

た。本シラバスは，人文科学の学科ごとに分化分離された教科編成への批判の高まりと，アメリカの新社会科カリキュラムの影響を受けて，統合教科として開発された。

本シラバスの目標は，人間と環境の相互作用を重視し，その関係性の文化的多様性を認識するとともに，複数の集団への帰属意識を形成することに求められた。この目標を達成するために，「社会と環境」のカリキュラム構造は，ストランド，レベル，学習プロセス，モジュールの４つの要素から成り立っている。まず，ストランドは，「時間，継続性と変化」，「場所と空間」，「文化とアイデンティティ」，「システム，資源と権力」の４つが設定されている。学年を追うごとに子どもが慣れ親しんだ文脈から疎遠な文脈へ，今の此処から時空間的に遠くに離れるように配列された社会へ適用するように学習させている。次に，探究プロセスは，「調査する」，「作成する」，「参加する」，「コミュニケーションする」，「省察する」の５つである。そして，レベルは１から６の６段階であり，レベル１・２が初等前期（1-2 年），レベル３は初等中期（3-4 年），レベル４は初等後期（5-7 年），レベル５・６は中等前期（8-10 年）の学年段階と対応している。最後に，モジュールは，単元に相当する学習のまとまりを構成している。モジュールはレベルごとに個数が異なり，合計で 63 個が設けられている。

本研究は，ストランド「文化とアイデンティティ」に関連するモジュールの中で，ナショナル・アイデンティティを直接的に扱うレベル２（3-4 年）のモジュール「私たちの顔：オーストラリアにおける帰属意識とアイデンティティ」を取り上げる。このモジュールは４つの段階で構成されている。４段階の学習過程を通して，オーストラリア国民について文化や民族性ではなく，生活を基盤として捉えさせるとともに（段階１），国家の特色を自然・建築・社会という視点から認識させ（段階２），この３つの視点から地域社会の特色を調査し（段階３），地域社会の特色を活かした祝祭を計画・実施させることで（段階４），子どもに多様な人々と文化から成る国家・地域社会への帰属意識を形成しようとしている。

本シラバスの開発では，カリキュラムの構造をめぐる２つの議論が展開された。第１に，知識体系を基盤とした伝統的アプローチか，経験を基盤とした進歩主義的アプローチか，の対立である。第２に，教科の構造を，学問的（disciplinary），複合的（multidisciplinary），学際的（interdisciplinary），横断的（transdisciplinary）のいずれとするかの対立である。結果的に「社会と環境」は，第１の論点について

は後者を選択し，第２の論点については前者（複合的）に踏み留まった。QLD 州の方針は，伝統的なカリキュラムからの離脱を図り，「デモクラシーの発見ユニット」の利用を教師の選択に委ね，より多様性尊重の路線を実質化した点に特質がある。

QLD 州「社会と環境」における文化的多様性と国民統合の調停とは，文化的多様性を尊重することによって，国民像を協働的に統合するという論理である。本シラバスにおいて，文化的多様性とは人種，民族，宗教などの差異を意味し，国民統合とは多様な文化的背景をもつ人々による国民共同体の協働的な構築を意味している。両者は，社会の共通規範と新たな挑戦という関係に立つことで，ストランドの設定では社会科学的な視点に由来する「時間，継続性と変化」，「場所と空間」，「文化とアイデンティティ」，「システム，資源と権力」という４つの観点から組織してオーストラリア社会を多様な見方ができることを強調するとともに，単元・学習過程では子どもがオーストラリア社会に参加する機会を与えることで，共通記憶やシンボルを議論し合い，創造させる。そうすることで，文化的多様性を基盤にして国民統合の可能性を追究するカリキュラムが成立している。

第５章　国民再構築型カリキュラム
―ニューサウスウェールズ州「歴史」（2012）―

第５章では，国民再構築型に位置づく典型例として，１年生から 10 年生を対象としたニューサウスウェールズ（以下，NSW）州の 2012 年版「歴史」シラバスを分析した。本シラバスは，ニューサウスウェールズ州教育基準局が開発した歴史教育カリキュラムである。本シラバスは，2008 年に開始された連邦政府によるナショナル・カリキュラムの開発と歴史教育の一律的な導入という教育政策の影響を受けて開発された（藤川，2018）。

本シラバスは，歴史の多様な捉え方と，民主主義や人権という規範に対する人々の多様な関与を認識させることを目指している。この目標を達成するために，シラバスは家族史，地域史，国家史，世界史という国家史に限定されない４つの歴史を学年段階に沿って配置し，それに合わせて歴史的スパンを数十年から数百年，数千年…と段階的に拡張していくように提示している。国家史に限らない，多様な歴史

の描き方があることを子どもに示すことで歴史の相対化を図る構成主義的な全体構成である。

本研究は，国家史を扱う Stage3（5-6 年生）で，20 世紀に焦点化した単元「国家としてのオーストラリア」を取り上げたい。全体構成の特質を踏まえると，カリキュラム（Early Stage1-Stage5）の中で，最も国家主義的な学習となりやすいのは，Stage3 の「国家としてのオーストラリア」である。1901 年の連邦結成以降を扱う「国家としてのオーストラリア」は，国家としての確立期の歴史であり，カリキュラム設計者が子どもの国家像やオーストラリア人としてのアイデンティティを相対化したいことが如実に表れる学習内容といえる。

本単元は，国家の発展に貢献してきた多様な主体を取り上げ，人々の働きを多元的に意味づけ，再評価させようとする。単元は，約 20 週をかけて実施することが想定されており，国家の発展に関わる事象の意義を考える，４つの小単元で構成されている。第１の小単元では，民主主義を視点に連邦国家が形成された過程を探究し，その過程を年表に整理させる。第２の小単元では，人権を視点に，先住民や移民，女性らの権利獲得と闘いの過程と，それに貢献した人物を調べさせる。第３の小単元では，多文化を視点に，移民らの生活の記録やインタビューを収集し，彼らの立場から描かれた国家の物語を捉えさせる。第４の小単元では，民主主義，人権，多文化の視点から国家史を捉え直し，どのような国家共同体の規範に対して，誰が，いかに関与してきたかを判断，評価する活動をさせている。このように歴史の捉え方を複数の枠組みから提示するとともに，共同体に対する人々の多様な貢献とその歴史的過程を再構築させる構成になっている。また，子どもに国家史を構成する証拠として何を選択し，どのような歴史として描くかの基準を考えさせ，その基準を説明させるという高度な歴史的思考を要求している。

本シラバスの開発では，教育制度，教科構造，歴史観をめぐる３つの議論が展開された。第１に，州カリキュラムはナショナル・カリキュラムと一貫性（consistency）を持つべきか，州の実態に合わせて最適化（streamline）されるべきか，の対立である。第２に，教科は個別学問（discipline）を基盤に構成されるべきか，統合（integrate）されるべきか，の対立である。第３に，歴史の展開を，イギリスに由来する白人移民の伝統を重視する歴史観（Whitewash）で構成するか，先住民族の歴史や彼らへの加害性を重視する歴史観（Black armband）で構成するか，の対立である。結果的に，NSW 州「歴史」は第１と第３の論点については後者を選択する

も，第２の論点については前者を選択した。NSW 州は，州独自のカリキュラム編成を追究しつつ，イギリスの影響を受けた伝統的な分化カリキュラムは堅持する。そして歴史学的な探究方法を使って人物やその功績に実証的に接近し，歴史の捉え方と国家への貢献の多様性を発見させようとした点に特質があるといえよう。

NSW 州「歴史」における文化的多様性と国民統合の調停とは，文化的多様性を視点として，国民像を再構築するという論理である。本シラバスにおいて，文化的多様性とは民主主義・人権・多文化というオーストラリア国家への貢献の評価の視点を意味し，国民統合とはこれらの視点からオーストラリア国家に「貢献」した人々を国民として定位することを意味している。両者は，評価の視点とそれによる国民像の再構築という関係に立つことで，テーマ設定では複数の主体による歴史（家族史，地域史，国家史，世界史）として組織して歴史の描き方を相対化するとともに，単元・学習過程では民主主義・人権・多文化という評価の視点に基づいて，国家の発展に貢献した国民を特定させている。そうすることで，国民統合の範囲を文化的多様性の視点から再規定するカリキュラムが成立している。

終章　本研究の成果・課題・示唆

終章では，本研究の成果と残された課題を総括し，さらなる研究の発展に向けた示唆を述べる。

本研究の第１の成果は，オーストラリアにおけるナショナル・アイデンティティ形成を図る社会系教科カリキュラムの理念型とその関係性を解明したことである。従来の研究において「ネオ国民国家」のナショナル・アイデンティティ形成の論理として想定されてきた国民動員型と国民参加型とは異なる，国民再構築型としてのカリキュラム構成を示し，社会系教科におけるナショナル・アイデンティティ形成の第３の道，３つ目の理念型を提起した点に意義がある。第２の成果は，オーストラリアにおける社会系教科カリキュラムの開発をめぐる諸言説をナショナル・アイデンティティ形成という視点から再構成することで，オーストラリアの社会系教科カリキュラムに関する理解をより洗練させたことである。理念型に基づく分析によって，先行研究における個別カリキュラムの特質の解明を超えて，移民の増加や多文化主義からの転換という国家的課題に翻弄されつつも，連邦政府と州がそれぞれ

の立場から社会系教科の構造と国民統合のあり方を模索してきたことを明らかにし，オーストラリア社会系教科カリキュラムの理解をより洗練させた点に意義がある。第３の成果は，日本の社会科教育研究におけるナショナル・アイデンティティ形成をめぐる議論を拡張した点である。従来，日本の社会科教育研究におけるナショナル・アイデンティティ形成をめぐる議論が，民族性などに依拠する国民動員型への批判に偏りがちであったという課題を指摘し，その枠組みを拡張する必要性を提起した点に意義がある。

本研究の第１の課題は，国民再構築型の限界の批判的検討である。具体的な実践を踏まえつつ，国民再構築型が抱える限界性をいかに乗り越えるかを検討し，次なるアプローチを模索する必要がある。第２の課題は，日本の文脈下での国民再構築型の開発的研究である。本研究で示した理念型のうち，日本の先行研究において提起されていなかった国民再構築型を，日本の教育制度や文脈に則してどのように開発・実践できるかは明らかにできていない。第３の課題は，オーストラリアにおけるナショナル・アイデンティティ形成の更なる具体像の解明である。今後，授業分析等を通して，制度・意図・実施・達成というカリキュラムの諸側面（安彦，2019）から，ナショナル・アイデンティティ形成に取り組む教育の具体像を明らかにする必要がある。

上記の成果と課題より，国民の境界をめぐる議論を対象化したカリキュラム開発の可能性が示唆される。現代及び今後の日本社会のナショナル・アイデンティティを構想し，共有されるべき価値と国民の範囲の再規定をめぐるせめぎ合いを通して，日本のナショナル・アイデンティティを文化的多様性に開かれたものとして，子ども一人ひとりが形成していくことが期待される。

主要参考文献一覧

〈英文〉

１．ACARA Homepage. (2010). https://www.acara.edu.au/（accessed 2023-12-21）.

２．Australian Curriculum, Assessment and Reporting Authority (ACARA, 2010). The Australian Curriculum: History v1.0. Retrieved February 1, 2011.

３. Anderson, B. (1991). *Imagined communities: Reflections on the origins and spread of nationalism.* Verso Books.

４．Allender, T., Clark, A., & Parkes, R. (Eds.). (2019). *Historical Thinking for History Teachers: A new approach to engaging students and developing historical consciousness.* Allen & Unwin.

５．Board of Studies NSW. (2012) *NSW SYLLABUS for the Australian curriculum HISTORY K-10 SYLLABUS,* Sydney.
https://educationstandards.nsw.edu.au/wps/portal/nesa/k-10/learning-areas/hsie/history-k-10（accessd 2023-12-21）

６．Bolt, A. (2000) Class revolution, *The Courier-Mail,* 10 June, 33.

７．Brighouse, H. (2003) Should We Teach Patriotic History?, in: K. McDonough & W. Feinberg (eds), *Citizenship and Education in Liberal-Democratic Societies: Teaching for cosmopolitan values and collective identities.* Oxford, Oxford University Press. and reprinted in R. Curren (ed.) (2007), *Philosophy of Education: An anthology* （pp. 528–538）. Oxford, Blackwell Publishing.

８．Bruce, H. (2009). History Teaching for Patriotic Citizenship in Australia. In Bruce, H (Ed.), *Patriotism and Citizenship Education* (pp.15-16). Wiley-Blackwell.

９．Burridge, N., Buchanan, J., & Chodkiewicz. (2014). “A. Human rights and history education: An Australian study.” *Australian Journal of Teacher Education (Online),* 39(3). 18-36.

10. Civics Expert Group. (1994). W*hereas the People ... Civics and Citizenship Education,* Canberra: Australia Government Printing Service.

11. Clark, A. (2008). History’s children: History wars in the classroom. Sydney: University of New South Wales.

12. Commonwealth of Australia. (2003). Multicultural Australia: United in Diversity, Updating the1999 New Agenda for Multicultural Australia: Strategic Directions for 2003-2006.

13. Cope, B. & Kalantzis, M. (1990) Literacy in the social sciences. In Christie, F. (Ed.) *Literacy for a Changing World.* Hawthorn, Vic.: The Australian Council for Educational Research.

14. Curren, R., & Dorn, C. (2018). *Patriotic Education in a Global Age (History and Philosophy of Education Series).* University of Chicago Press.

15. Davidson, A. (2000). “Democracy and Citizenship, in Wayne, H., & John, K. (eds) *Rethinking Australian*

Citizenship (pp.45-55). Melbourne: Cambridge University Press.

16. De Leo, J. (2006). International Education and Intercultural Learning for Sustainable Development: Beyond the Four Pillars - Wisdom for Transformation towards Sustainability. Paper presented at the 10th APEID International Conference December 6-8th Bangkok Thailand.
17. Discovering Democracy Units Homepage. https://www1.curriculum.edu.au/ddunits/index.htm (accessed 2021-07-08).
18. Erebus Consulting Group. (1999). *Evaluation of the Discovering Democracy Program: A Report to the Commonwealth Department of Education, Training and Youth Affairs,* Canberra, DETYA.
19. Ferres, K., & Meredyth, D. (2001). *An Articulate Country: Re-inventing Citizenship in Australian Rationalist,* No.38, 28-32.
20. Gilbert, R. (2003). SEAA tomorrow: SOSE and the future. *Social Educator*, *21*(2), 8-14.
21. Habermas, J. (1994). Struggles for recognition in the Democratic constitutional state. In A. Gutman (Ed.), *Multiculturalism : Examining the Politics of Recognition* (pp.106–184). Princeton University press.
22. Harris, C., & Marsh, C.J. (2007). SOSE curriculum structures: Where to now? *Ethos, 15*, 10-14.
23. Haynes, B. (2009). History teaching for patriotic citizenship in Australia. *Educational Philosophy and Theory*, *41*(4), 424-440.
24. Henderson, D. (2011). History in the Australian Curriculum F-10: Providing answers without asking questions. *Curriculum Perspectives,* 31(3), 57-63.
25. Hobsbawm, E., & Ranger, T. (Eds.) (1983). *The invention of tradition.* Cambridge University Press.
26. Kennedy, K., Marland, P., Sturman, A., & Forlin, C. (1996). Implementing national curriculum statements and profiles: corporate federalism in retreat. *Forum of Education* 51(2), 33-42.
27. Kennedy, K. (2009). The idea of a national curriculum in Australia: What do Susan Ryan, John Dawkins and Julia Gillard have in common? *Curriculum Perspectives,* 29 (1), 1-9.
28. Lee, W.O. & Fouts, J.T. (ed) (2005). *Education for Social Citizenship: Perceptions of Teachers in the USA, Australia, England Russia and China*, Hong Kong University Press.
29. Maadad, N., & Rodwell, G. (2016). Whose history and who is denied? Politics and the History Curriculum in Lebanon and Australia. *The International Education Journal: Comparative Perspectives,* 15(4), 86-99.
30. Macintyre, S & Clark, A. (2003). *The History Wars.* Melbourne University Press.
31. Macintyre, S. (2019). Understanding the Australian Curriculum: History. Allender, T., Clark, A & Parkes, R(Eds.), *HISTORICAL THINKING FOR HISTORY TEACHERS A new approach to engaging students and developing historical consciousness* (pp.18-30). Allen & Unwin.

32. Marsh, C.J. (1994). *Producing a National Curriculum: Plans and Paranoia.* Allen & Unwin, Sydney

33. Marsh, C. J. (ed)（2004）. *Teaching About Studies of Society and Environment* 4th edition, Pearson, Sydney.

34. Marsh, C.（2005）. Conceptual structures and studies of society and environment: shifting sands or is the beach bare? *Ethos*,13(1), 6-9.

35. Miller, D. (1995). *On nationality.* Clarendon press.

36. Parkes, R. J & Donnelly, D. (2014). "Changing conceptions of historical thinking in History education: an Australian case study." *Revista Tempo e Argumento,* 6(11), 113-136.

37. Peterson, A., & Tudball, L. (Eds.). (2018). *Civics and Citizenship Education in Australia ―Challenges, Practices and International Perspectives ―*. Bloomsbury Academic.

38. Print, M. (2007). Citizenship Education and Youth Participation in Democracy. *British Journal of Educational Studies,* 55(3), 325–345.

39. Print, M. (2018). The Recent History of Teaching Civics and Citizenship Education in Australia, 1989–2015. In Peterson, A & Tudball, L (Eds.), *Civics and Citizenship Education in Australia*(pp.7-22). Bloomsbury USA Academic.

40. Reynolds, R. (2019). *Teaching Humanities and Social Sciences in the Primary School (4th ed.)*. Oxford University Press.

41. Reid, A. (2009). Is this a revolution? : A critical analysis of the Rudd Government's national education agenda. *Curriculum Perspectives, 29 (3)*, 1-13.

42. Schachter, E, P., & Rich, Y. (2011). Identity Education: A Conceptual Framework for Educational Researchers and Practitioners. *Educational Psychologist, 46,* 222-238.

43. Smith, A.D. (1991). *National identity.* Reno, NV: University of Nevada Press.

44. Snyder, I. (2008). *The Literacy Wars: Why Teaching Children to Read and Write is a Battleground in Australia.* Allen & Unwin.

45. SOSE (2000). sourcebook modules Our faces: Belonging and identities in Australia. https://www.qcaa.qld.edu.au/downloads/p_10/kla_sose_sbm_209.pdf

46. Taylor, T.(2019). Historical consciousness and the Australian Curriculum. Allender, T., Clark, A & Parkes, R. *HISTORICAL THINKING FOR HISTORY TEACHERS: A new approach to engaging students and developing historical consciousness.* (pp.3-17). Allen & Unwin.

47. The Australian Curriculum Homepage. https://www.australiancurriculum.edu.au/（accessed 2023-12-21）

48. The Office of the Queensland School Curriculum Council. (2000a). *Studies of Society and Environment Years*

1 to 10 Sourcebook Guidelines.

49. The Office of the Queensland School Curriculum Council.(2000b). *Studies of Society and Environment Years 1 to 10 Syllabus with Years 9 and 10 optional subject syllabuses.*

50. The State of Queensland (The Office of the Queensland School Curriculum Council). (2000). *Studies of Society and Environment Years 1 to 10 Syllabus with Years 9 and 10 optional subject syllabuses.*

51. Thomas, J. (1994). "The History of Civics Education in Australia. In Civics Expert Group. *Whereas the People ... Civics and Citizenship Education* (pp.161-171). Canberra: Australia Government Printing Service.

52. Tudball, Libby., & Henderson, D.(2014).Contested notions of civics and citizenship education as national education in the Australian curriculum. *Curriculum and Teaching,* 29(2), 5-24.

53. Verdugo, R., & Milne, A. (Eds.). (2016). *National Identity Theory and Research.* Information Age Publishing.

54. Wiltshire, K., & Donnelly, K. (2014). Review of the Australian curriculum final report. Australian Government Department of Education.

55. Whitehouse, J. (2011). Beyond time, continuity and change: Reasoning, imagination and the future of history. *Curriculum Perspectives, 31(3)*, 84-88.

〈邦文〉

１．青木麻衣子（2020）「第１章　社会と学校教育」青木麻衣子・佐藤博志（編）『第三版　オーストラリア・ニュージーランドの教育―グローバル社会を生き抜く力の育成に向けて』東信堂，5-25.

２．姉川雄大（2020）「教育は人々を「国民」にしたか」岩下誠・三時眞貴子・倉石一郎・姉川雄大（著）『問いからはじめる教育史』有斐閣，203-222.

３．安彦忠彦（2019）「第１章　カリキュラムとは何か」日本カリキュラム学会（編）『現代カリキュラム研究の動向と展望』教育出版，2-9.

４．アンダーソン，ベネディクト（著），白石隆・白石さや（訳）（2007）『定本　想像の共同体ーナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山.

５．飯笹佐代子（2005）「多文化国家オーストラリアのシティズンシップ教育―「デモクラシーの発見」プログラムの事例から―」『オーストラリア研究』17，53-68.

６．飯笹佐代子（2007）『シティズンシップと多文化国家―オーストラリアから読み解く』日本経済評論社.

７．池野範男（2007）「何に忠誠できるのかーシティズンシップのための教育ー」明治図書『現代教育科学』50(6)，50-52.

８．石附実（2001）「オーストラリアの概観」石附実・笹森健（編）『オーストラリア・ニュージーラ

ンドの教育』東信堂，21-26.
9．上田千裕（2010）「オーストラリアのシティズンシップ教育におけるアイデンティティ形成ー多様性の尊重と統合の観点からの“Australian Readers”とニューサウスウェールズ州カリキュラムの分析ー」『大阪教育大学社会科教育学研究』9，9-18.
10. ウェーバー，マックス（著），富永祐治・立野保男（訳），折原浩（補訳）（1998）『社会科学と社会政策にかかわる認識の客観性』岩波書店.
11. 海野士郎（2001）「オーストラリア・ニュージーランド教育の土壌」石附実・笹森健（編）『オーストラリア・ニュージーランドの教育』東信堂，3-18.
12. ヴィローリ，マウリツィオ（著），佐藤瑠威・佐藤真喜子（訳）（2007）『パトリオティズムとナショナリズムー自由を守る祖国愛』日本経済評論社.
13. 大澤真幸・塩原良和・橋本努・和田伸一郎（2014）『ナショナリズムとグローバリズム　越境と愛国のパラドックス』新曜社.
14. 岡本智周（2001）『国民史の変貌―日米歴史教科書とグローバル時代のナショナリズム―』日本評論社.
15. 岡本智周（2006）「多文化教育と日系アメリカ人のナショナルアイデンティティ」『筑波教育学研究』4，47-63.
16. 奥村みさ（2021）「シンガポールにおける多文化教育―中等学校社会科教科書分析を中心に―」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』23，109-129.
17. 小熊英二（1998）『〈日本人〉の境界―沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮：植民地支配から復帰運動まで』新曜社.
18. 押井那歩（2022）「オーストラリアにおけるエコペダゴジーに基づく社会科環境学習論―クイーンズランド州「社会と環境」―カリキュラムの検討」『学校教育学研究論集』45，49-62.
19. 尾原康光（2009）『自由主義社会科教育論』溪水社.
20. 角田将士（2003）「戦前期中学校国史教科書における歴史認識形成の論理ー国家政策に応じた歴史教育内容修正ー」『社会科研究』59，61-70.
21. 角田将士（2016）「初期社会科における国土学習の特質―市民性育成と国民教育の接合に着目して―」『社会科研究』84，25-36.
22. 加藤公明（2007）「高校生の国家観およびナショナルアイデンティティの成長をはかる歴史教育―『考える日本史授業』の実践を通じて―」『中等社会科教育研究』26，1-13.
23. 金子邦秀（1995）『アメリカ新社会科の研究―社会科学科の内容構成―』風間書房.
24. 金子邦秀（2000）「新社会科」森分孝治・片上宗二（編）『社会科重要用語 300 の基礎知識』明治

図書出版株式会社，29.
25. 川上勉（2003）「第４章ナショナル・アイデンティティの２つの側面ー動員と参加ー」中谷猛・川上勉・高橋秀寿（編著）『ナショナル・アイデンティティ論の現在ー現代世界を読み解くためにー』晃洋書房，67-90.
26. 川口広美（2022）「ストランド」棚橋健治・木村博一（編）『社会科重要用語事典』明治図書，127.
27. 北村友人（編）（2016）「序論　グローバル時代における「市民」の育成」『岩波講座　教育　変革への展望７　グローバル時代の市民形成』岩波書店，1-20.
28. 金鍾成・山口安司・久保美奈・鈩悠介・城戸ナツミ（2021）「自らの国の愛し方を批判的に検討できる市民を育てる中学校社会科授業のアクションリサーチ―ナショナリズムと批判的パトリオティズムを概念的枠組みとして用いて―」『社会系教科教育学研究』33，51-60.
29. 木村裕（2007）「南オーストラリア州の SACSA の基本的な構想に関する一考察―「社会と環境」の領域に焦点をあてて―」『教育方法の探究』10，33-40.
30. 木村裕（2014）『オーストラリアのグローバル教育の理論と実践ー開発教育研究の継承と新たな展開』東信堂.
31. 木村裕・竹川慎哉（2019）『子どもの幸せを実現する学力と学校ーオーストラリア・ニュージーランド・カナダ・韓国・中国の「新たな学力」への対応から考える』学事出版.
32. キムリッカ，ウィル（著），角田猛之・石山文彦・山﨑康仕（監訳）（1998）『多文化時代の市民権―マイノリティの権利と自由主義―』晃洋書房.
33. キムリッカ，ウィル（著），岡崎晴輝・施光恒・竹島博之（監訳），栗田佳泰・森敦嗣・白川俊介（訳）（2012）『土着語の政治―ナショナリズム・多文化主義・シティズンシップ』法政大学出版局.
34. 桐谷正信（2000）「歴史カリキュラム開発における「多様性」と「統一性」―ニューヨーク州合衆国史カリキュラム改訂を事例にして―」『社会科研究』53，43-52.
35. 桐谷正信（2011）「多文化教育から問いなおすナショナル・シティズンシップ―アメリカの歴史カリキュラム改革を通して―」『国際理解教育』17，65-74.
36. 桐谷正信（2012）『アメリカにおける多文化的歴史カリキュラム』東信堂.
37. 桐谷正信（2019）「歴史教育における多様性の学び方」森茂岳雄・川﨑誠司・桐谷正信・青木香代子（編著）『社会科における多文化教育―多様性・社会正義・公正を学ぶ』明石書店，95-109.
38. 草原和博（2002）「社会科学教育としての社会科の成立理由―社会科学力観の再検討―」『社会科研究』56，1-10.
39. 草原和博（2006）「社会科の思想的基盤―個（わたし）と共同性（わたしたち）をどうとらえるか

—」原田智仁（編著）『“国民的アイデンティティ”をめぐる論点・争点と授業づくり』明治図書, 43-59.
40. 草原和博・溝口和宏・桑原敏典（編著）（2015）『社会科教育学研究法ハンドブック』明治図書.
41. 工藤文三（2000）「国民としての自覚・日本人としての自覚」森分孝治・片上宗二（編）『社会科重要用語 300 の基礎知識』明治図書, 108.
42. 黒田明雄（2008）「シンガポールにおける国民・市民形成の教育の特質—『Singapore: The Next Lap』と現行カリキュラムの分析を通して—」『倉敷芸術科学大学紀要』13, 181-192.
43. 黒田明雄（2009）「シンガポールの社会科教育の特質に関する一考察—初等社会科シラバスの分析から—」『倉敷芸術科学大学紀要』14, 179-192.
44. ゲルナー, アーネスト（著）加藤節（監訳）（2000）『民族とナショナリズム』岩波書店.
45. 児玉奈々（2017）『多様性と向きあうカナダの学校—移民社会が目指す教育』東信堂.
46. 児玉康弘（1999）「社会認識教育における科学的「ネーション」概念の育成方法」『教育方法学研究』25, 47-57.
47. 酒井喜八郎（2018）「オーストラリアの新社会科 HASS の動向と特質ーナショナル・カリキュラムとクイーンズランド州の事例の分析からー」『教育方法学研究』43, 1 -12.
48. 笹森健（2001）「1980 年以降の教育改革の理念と動向」石附実・笹森健（編）『オーストラリア・ニュージーランドの教育』東信堂, 27-37.
49. 佐藤成基（2014）『国家の社会学』青弓社.
50. 佐藤仁（2018）「教育借用から考える「場」としての規範的比較教育政策論の可能性」『比較教育学研究』57, 13-31.
51. 塩原良和（2005）『ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義—オーストラリアン・マルチカルチュラリズムの変容』三元社.
52. 塩原良和（2012）『共に生きる—多民族・多文化社会における対話』弘文堂.
53. 塩原良和（2014）「マイノリティとポジショナリティ」大澤真幸・塩原良和・橋本努・和田伸一郎『ナショナリズムとグローバリズム　越境と愛国のパラドックス』新曜社, 272-277.
54. 塩原良和（2017）『分断と対話の社会学—グローバル社会を生きるための想像力』慶應義塾大学出版会.
55. 塩原良和（2019）「分断社会における排外主義と多文化共生—日本とオーストラリアを中心に」『クァドランテ』21, 107-119.
56. 下村隆之（2012）「オーストラリアの社会科カリキュラムの構成と展開 : ニューサウスウェールズ州を事例として」『近畿大学教育論叢』24(1), 17-34.

57. 下村隆之（2020）「ニュー・サウス・ウェールズ州における歴史教育の変容：ナショナル・カリキュラムの影響を受けて」『オーストラリア研究』33，15-28.
58. スミス，D，アントニー（著），高柳先男（訳）（1998）『ナショナリズムの生命力』晶文社.
59. 関根政美・塩原良和（編）（2008）『叢書 21COE-CCC 多文化世界における市民意識の動態 37　多文化交差世界の市民意識と政治社会秩序』慶應義塾出版会.
60. 関根政美・塩原良和・栗田梨津子・藤田智子（2020）『オーストラリア多文化社会論―移民・難民・先住民族との共生をめざして』法律文化社.
61. ダイアモンド，ジャレド（著），小川敏子・川上純子（訳）（2019）『危機と人類』上下日本経済新聞出版社.
62. 竹田いさみ・永野隆行（2023）『物語　オーストラリアの歴史　新版』中央公論新社.
63. 竹川慎哉・木村裕（2020）「カリキュラムと教育評価」青木麻衣子・佐藤博志（編）『第三版　オーストラリア・ニュージーランドの教育―グローバル社会を生き抜く力の育成に向けて』東信堂，27-43.
64. 田中正弘（2005）「教育借用の理論ー最新研究に動向ー」『人間研究』41，29-39.
65. 田辺俊介（2010）『ナショナル・アイデンティティの国際比較』慶応義塾大学出版会.
66. 坪田益美（2009）「多元社会カナダにおける社会的結束に取り組むシティズンシップ教育―アルバータ州社会科の「多様性の調整」に着目して―」『社会科教育研究』108，44-57.
67. 坪田益美（2012）「「社会的結束」に取り組むカナダ・アルバータ州の社会科カリキュラムの構造―「深い多様性」の尊重と「多様性の調整」に着目して―」『社会科研究』77，13-24.
68. 坪田益美（2015）「多文化共生社会に向けた社会科の単元構成の枠組み― “Issues-Focused Approach” の可能性―」『社会科教育研究』125，84-95.
69. 戸田善治（2012）「連合王国における歴史教育と「アイデンティティ・クライシス」―イングランドにおけるイングリッシュネスとブリティッシュネスを中心に―」『千葉大学人文社会科学研究』24，1-13.
70. 中谷猛（2000）「「ナショナル・アイデンティティ」の概念に関する問題整理―国民国家論研究のためのノート」『立命館法學』271・272，1301-1332.
71. 永田成文（2010a）「ESD の視点を導入した地理教育の授業構成―オーストラリア NSW 州中等地理を事例として―」『社会科教育研究』109，28-40.
72. 永田成文（2010b）「市民性をいくせいする地理学習の授業構成―オーストラリア NSW 州中等地理「人口問題」単元の分析を通して―」『社会系教科教育学研究』22，21-30.
73. 永田成文（2011）「系統地理を基盤とした市民性を育成する地理教育の授業構成―オーストラリア

VIC 州中等地理を事例として―」75，41-50.

74. 永田成文（2015）「防災意識を高める景観の視点を導入した地理教育の授業構成―オーストラリアのナショナルカリキュラムに対応した中等地理単元を手がかりに―」『社会科教育研究』126，14-26.

75. 二井正浩（2006）「第４節　社会科教育におけるナショナル・アイデンティティの形成」日本教科教育学会出版プロジェクト（編）『新時代を拓く社会科の挑戦』第一学習社，141-150.

76. 丹生英治（2007a）「歴史教育課程におけるナショナルな時間的認識形成の分析―合衆国史『ナショナル・スタンダード』をてがかりとして―」『社会科研究』67，51-60.

77. 丹生英治（2007b）「歴史教育課程におけるナショナルな時間的認識形成の構造―中学校学習指導要領社会とその準拠歴史教科書をてがかりとして―」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部文化教育開発関連領域』56，65-74.

78. 丹生英治（2007c）「歴史教育課程におけるナショナルな空間認識形成の分析―学習指導要領社会を手がかりとして―」『社会系教科教育学研究』19，73-80.

79. 橋川文三（2015）『ナショナリズム　その神話と論理』筑摩書房.

80. 橋崎頼子（2012）「アイデンティティの多様性を尊重するシティズンシップ教育カリキュラムー多様性と統合の原理に注目してー」『同志社大学教職課程年報』1，5-18.

81. 橋崎頼子（2018）「アイデンティティの複数性と動態的な文化理解にもとづく議論に向けた関係構築ー欧州評議会におけるシティズンシップ教育の事例を通してー」『社会科教育研究』134, 98-107.

82. 蓮尾浩之「理念型（Idealtypus）」見田宗介（顧問），大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一（編）（2012）『現代社会学事典』弘文堂，1320.

83. 蓮見二郎（2007）「公共的価値の教育としての愛国心教育ー英国のシティズンシップ教育におけるBritishness 概念を参考にー」『公民教育研究』15，49-63.

84. 原田智仁（2006）「国民的アイデンティティをめぐる論点・争点は何か」原田智仁（編著）『“国民的アイデンティティ”をめぐる論点・争点と授業づくり』明治図書，11-21.

85. バリバール，エティエンヌ・ウォーラーステイン，エマニュエル（2014）『人種・国民・階級―「民族」という曖昧なアイデンティティ』唯学書房.

86. 藤川隆男（2015）「オーストラリアにおける歴史教育の統一的・全国的カリキュラムの導入―歴史戦争を終えて―」『パブリック・ヒストリー』12，15-28.

87. 藤川隆男（2018）「オーストラリアの「歴史戦争」―新自由主義の代償」橋本伸也（編）『紛争化させられる過去―アジアとヨーロッパにおける歴史の政治化―』岩波書店，109-130.

88. ホブズボーム，J，エリック（著），浜林正夫・嶋田耕也・庄司信（訳）（2001）『ナショナリズム

の歴史と現在』大月書店.
89. 松尾知明（2017）『多文化教育の国際比較―世界 10 カ国の教育政策と移民政策―』明石書店.
90. 見世千賀子（2007）「第２部各国のシティズンシップ教育　２北米・オセアニア編　１オーストラリア―ナショナル・アイデンティティの再構築」嶺井明子（編著）『世界のシティズンシップ教育―グローバル時代の国民／市民形成―』東信堂，96-107.
91. 南浦涼介（2022）「愛国心」棚橋健治・木村博一（編）『社会科重要用語事典』明治図書，50.
92. 南川文里（2022）『アメリカ多文化社会論（新版）―「多からなる一」の系譜と現在―』法律文化社.
93. 嶺井明子（編著）（2007）『世界のシティズンシップ教育―グローバル時代の国民／市民形成―』東信堂.
94. 村田ひろ子（2014）「日本人が持つ国への愛着とは : ISSP 国際比較調査(国への帰属意識)・日本の結果から」『放送研究と調査』64(5)，16-31.
95. 森才三（1999）「現代史学習の授業構成―小単元『国民国家の形成とその行方』の場合―」『社会科研究』50，261-270.
96. 森田真樹（1997）「多文化社会米国における歴史カリキュラム開発―合衆国史ナショナル・スタンダードをめぐる論争を手がかりに―」『カリキュラム研究』6，41-51.
97. 森田真樹（2006）「アメリカの社会科で国民的アイデンティティはどう論じられているか」原田智仁編著『“国民的アイデンティティ”をめぐる論点・争点と授業づくり』明治図書，32-42.
98. 森茂岳雄・川﨑誠司・桐谷正信・青木香代子（2019）『社会科における多文化教育―多様性・社会正義・公正を学ぶ』明石書店.
99. 森分孝治（1986）「歴史独立論の問題性―原理的考察―」『社会科教育論叢』34，78-88.
100. 森分孝治（2003）「20 世紀社会科の脱構築」社会認識教育学会編『社会科教育のニュー・パースペクティブ―変革と提案―』明治図書，14-23.
101. ヤイスマン，ミヒャエル（著），木村靖二（編）（2007）『YAMAKAWA LECTURES4 国民とその敵』山川出版社.
102. 山田秀和（2015）「研究のプロセスと論文の組み立て」草原和博・溝口和宏・桑原敏典（編著）（2015）『社会科教育学研究法ハンドブック』明治図書，48-67.
103. 山根栄次（2008）「愛国心教育と経済教育―「社会科ですべきこと・すべきでないこと」の再検討―」『社会科教育研究』104，35-42.
104. 山本友和（1997）『多文化のなかでの教育―オーストラリアの社会科に学ぶ』スターツ出版
105. 油井大三郎・遠藤泰生（編）（1999）『多文化主義のアメリカ―揺らぐナショナル・アイデンティ

ティ―』東京大学出版会.
106. 吉川幸男（2012）「社会科と国民国家」社会認識教育学会（編）『新社会科教育学ハンドブック』明治図書.
107. 吉田剛（2010）「シンガポール中学校低学年地理科シラバスにおけるナショナルシティズンシップ育成」『社会系教科教育学研究』22，41-50.
108. 吉田剛（2011）「ナショナルシティズンシップ育成のためのシンガポール小学校社会科の構成原理」『公民教育研究』18，81-95.
109. 吉田剛（2013）「シンガポール小学校社会科教科書にみる人物の取り上げ方―ナショナルシティズンシップ育成のために―」『社会科教育研究』118，28-38.
110. 吉田剛・管野友佳（2016）「オーストラリアにおける「ニューサウスウェールズ州」および「連邦」地理カリキュラムの地理的概念の機能に関する比較研究―コンピテンシー・ベースによる地理カリキュラムからの示唆」『社会系教科教育学研究』28，101-110.
111. 吉田剛・管野友佳（2023）「オーストラリア連邦ニューサウスウェールズ州幼小中高一貫地理シラバス 2015 年版の地理的探究スキルの分析―我が国の「社会的事象等について調べるまとめる技能」の改善に向けて―」『宮城教育大学教職大学院紀要』4，51-63.
112. 與田純（2001）「イギリスの『大歴史論争』―歴史教育とブリティッシュ・アイデンティティ―」『歴史学研究』748，49-61.
113. レイヴ，ジーン・ウェンガー，エティエンヌ（著），佐伯胖（訳）（2013）『状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加』産業図書.
114. 渡部竜也（2009）「自由主義社会は「政治的なもの」の学習を必要としないのか―尾原康光氏の論考の再検討―」『公民教育研究』17，49-63.